

市来式の祖形と南島先史文化への影響

河 口 貞 徳

1

縄文文化と南島先史文化との間に、相互の結び付きを示す最初の資料が発見されたのは、1955年（昭和30）に行われた九学会考古班の、笠利町宇宿貝塚発掘調査によってであった。宇宿貝塚から出土した土器は、宇宿上層式と下層式の区別が立てられ、下層式に伴って縄文後期の市来式土器および一湊式土器が少量発見された。これが従来漠然としていた南島の先史時代の編年に唯一の基準を与えることとなった。

その後、市来式土器は、沖縄島南部の浦添市浦添貝塚からも発見（1969年）され、更に奄美大島南部の瀬戸内町嘉徳遺跡の発掘（1974年）によって、市来式土器と面縄東洞式土器（宇宿下層式の中の一型式）とが共伴することが明らかとなり、両文化圏を繋ぐベルトの様相が次第に明らかとなると同時に、南島先史文化の特相も鮮明の度を加え、それが縄文後期に該当する時期に主体を有することも判明した。

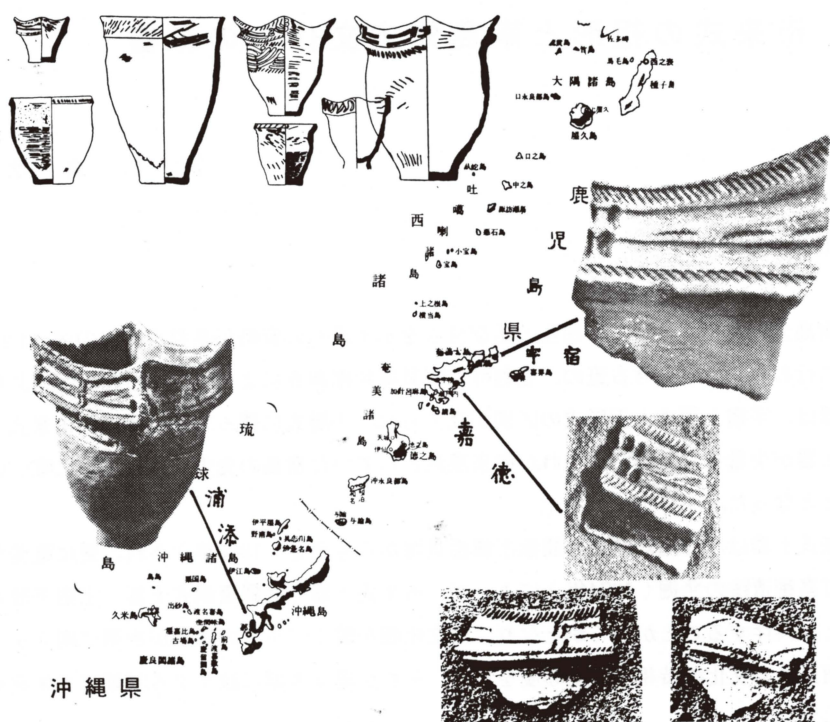
1965年（昭和40）に喜界町赤連の喜界高等学校校庭の拡張工事によって、砲弾形尖底と推定される土器片が発見された。内外面を貝殻腹縁によって器面調整し、貝殻腹縁および篋による押圧文・連点文・羽状文で外面をかざり、口縁内面にも貝殻腹縁による押圧文を一段施文する土器である。九州における縄文前期後葉の壱式土器に類する縄文土器で「赤連系」土器と呼ばれている。1973年（昭和48）には十島村宝島の大池遺跡（国分直一発掘）から、壱式土器の一種である点線文^①を有する土器と、赤連系土器とが共伴出土し、14C年代 4820 ± 95 Y. B. P.の測定値が示されている。

壱式土器片は、嘉徳遺跡および宇宿貝塚から若干出土し、沖縄県読谷村渡具知東原遺跡でも発見されている。赤連系土器は、宇宿貝塚に隣接する笠利町高又遺跡（1977年熊大発掘）からは、入れ子の状態で完形土器が出土し、沖縄市室川貝塚下層からも発見されている。

壱式土器および赤連系土器が、本土・薩南諸島から南島へ伝播したのと相前後して、曾畑式土器^②の移行型式である阿多貝塚Ⅴ類土器も南島へ移入され、高又遺跡・渡具知東原遺跡などで発見されている。

以上に述べた赤連系土器発見以降の南島での縄文土器の発見は、縄文後期に見られた市来式土器のさかんな伝播期以前に、今一つの土器文化の伝播期があったことを示すもので、その時期は壱式・曾畑式およびその系列の土器が示唆するように縄文前期末の頃である。

1975・76年（昭和50・51）に発掘された渡具知東原遺跡の下層から爪形文土器が発見され、本土の爪形文土器と対比し草創期とされた。これより早く1960年（昭和35）に国分直一らによって発掘



第一図 左は草野貝塚出土の市来式 その他南島出土の市来式

された沖縄県のヤブチ洞穴および、1963年（昭和38）に三島格らによって発掘された奄美大島の笠利町ヤーヤ洞穴からは、既に同一型式の爪形文土器が発見されていたにもかかわらず、これらの土器が草創期に擬されるようになったのは、渡具知東原遺跡の発掘以後である。

奄美諸島では、爪形文土器を出土する遺跡は、ヤーヤ洞穴の他に笠利町高又遺跡、同町土盛東原遺跡（1981年中山清見発見）などが新たに発見され、さらに名瀬市知名瀬城田遺跡（1981年里山勇広発見）でも、器壁の厚い爪形文土器が採集されるなど、爪形文土器文化が定着していたことを示している。

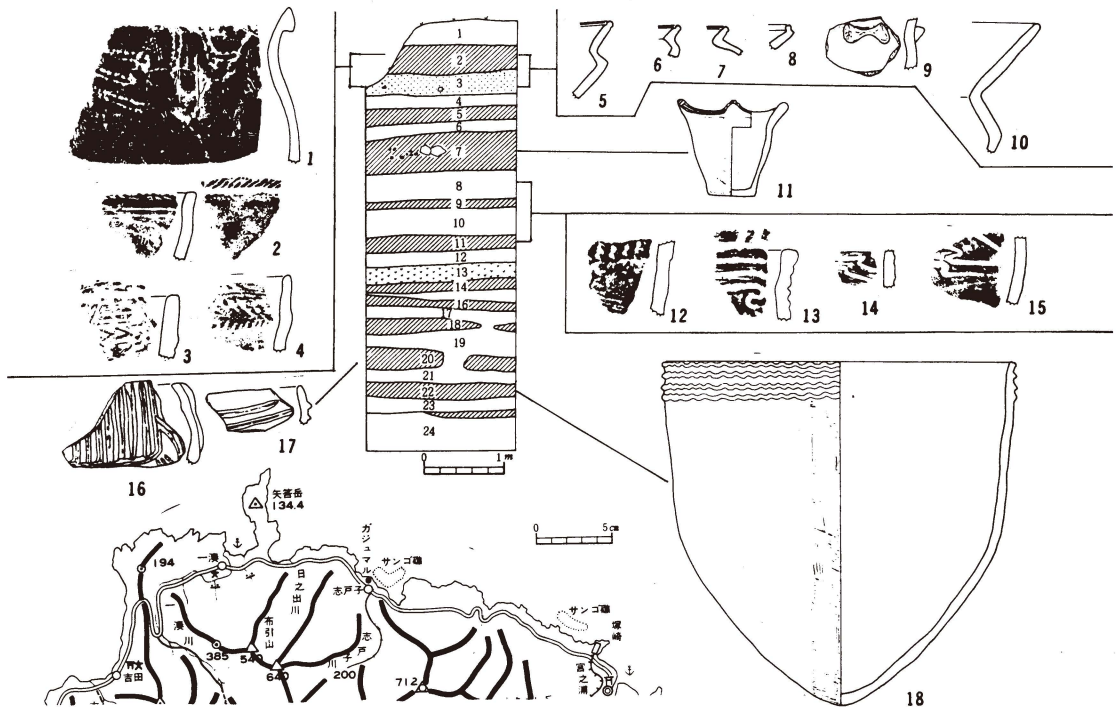
南島の先史時代には、顕著な土器文化として、草創期の爪形文土器文化、前期末の縄式・曾畑式およびそれらの系統の土器文化、後期の市来式土器文化などのあることをあげたが、最近松山式土器文化の伝播が判明し、南島の先史文化にとって重要な位置をしめることがわかって来た。このことについては後に述べることにして、以上の他にもなお若干の土器文化の伝播も知られるに至っており、今後も新たな発見が予想される。

以上にあげた縄文土器文化の他に、奄美諸島には独自の土器文化がある。この文化こそ奄美諸島本来の先史時代の様相を示すものである。しかし現在判明している奄美諸島の土器は、最も古いものでも、縄文後期の時期以前にさかのぼるものは見られない。おそらくこの頃が奄美諸島独自の土器文化の発生期ではないかと考えられる。

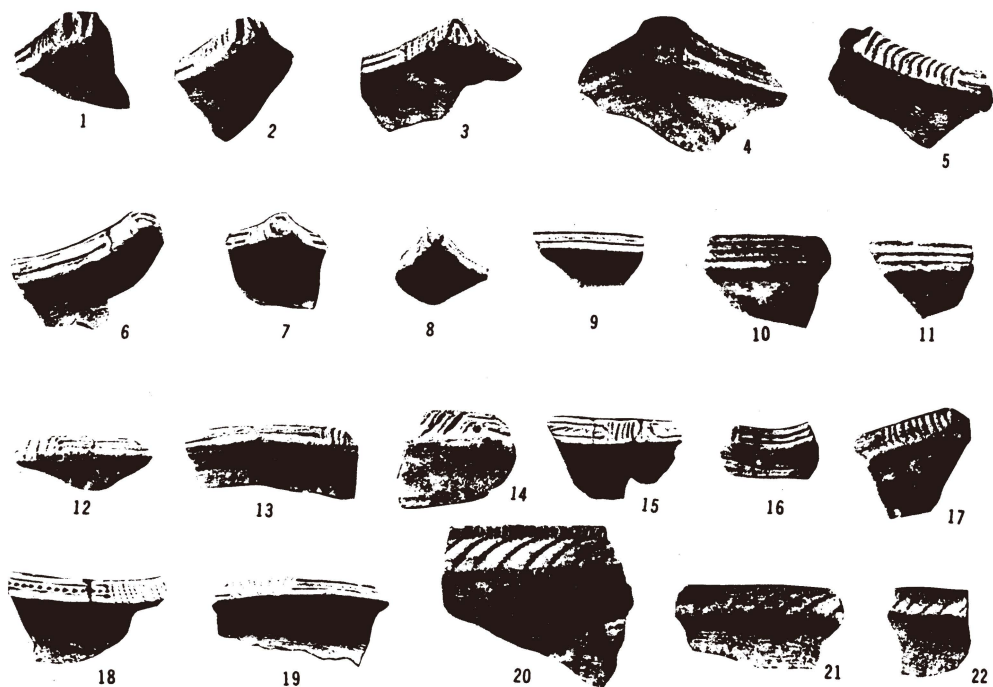
1980年（昭和55）上屋久町の委嘱によって県文化課の出口浩・繁昌正幸が一湊遺跡の発掘を行なった。河口も2・3日手伝ったが、遺跡に到着したのは第7層の（第2図）遺物がきれいに出土したところであった。市来式ということであったが、市来式とはことなる新しい型式で、第2第3層は攪乱気味ではあるが、一湊式と市来式の包含層であり、この層より3つの無遺物層をへだてた第7層は、まったくの単純層で、上層からの混入など考えられない良好な出土条件を備えていた。そこで第7層の出土土器を、出土地の地名をとって「松山式」と名付けるように、調査者に伝えた。報告書に「第7類土器」とあるのがそれである。

松山式土器は胴部に張りのある深鉢形平底の土器で、波状口縁と平坦な口縁を呈するものがある。特徴は口唇部を文様帯とすることである。したがって口唇面を広げる必要を生じ、普通の口縁部を有するもの（第4図6）から、蒲鉾状の口縁のもの（第4図2・5）、口唇部が広がって外側へ傾斜し、断面が三角形を呈するに至るもの（第4図3・4）まで、口縁部の変化の過程が明瞭に示めされている。

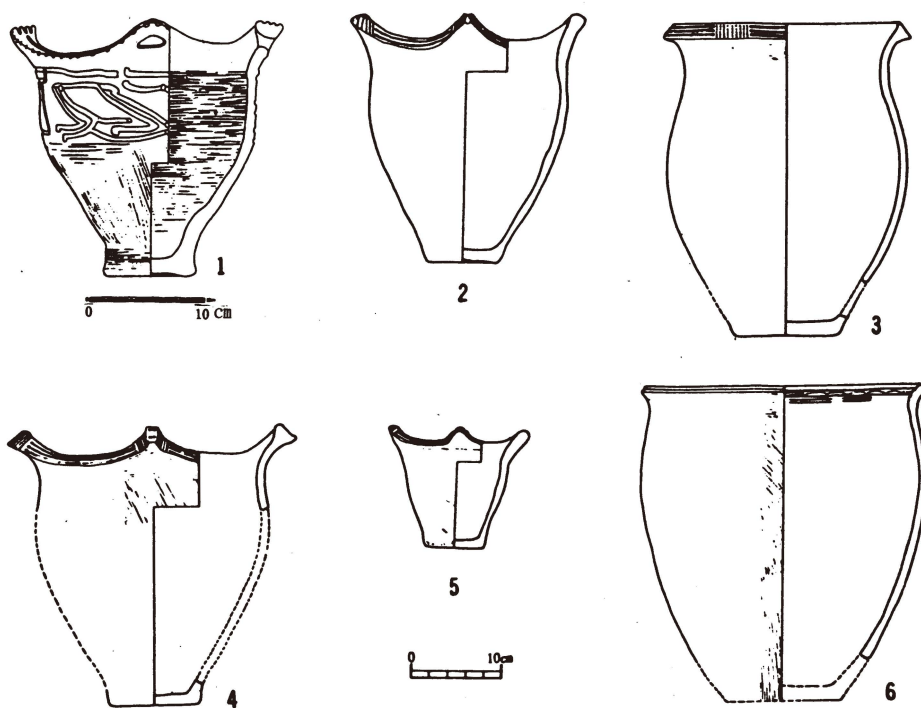
文様は、前述のとおり口唇面を施文帯としているが、まれに胴部上面に（第3図8・16）および口縁部内面（第4図6）に沈線文・貝殻腹縁による押圧文を施し、松山式に先行する型式の名残を



第二図 一湊遺跡の層序と出土の土器（一湊松山遺跡より）



第三図 一湊遺跡出土の松山式土器（一湊松山遺跡より）



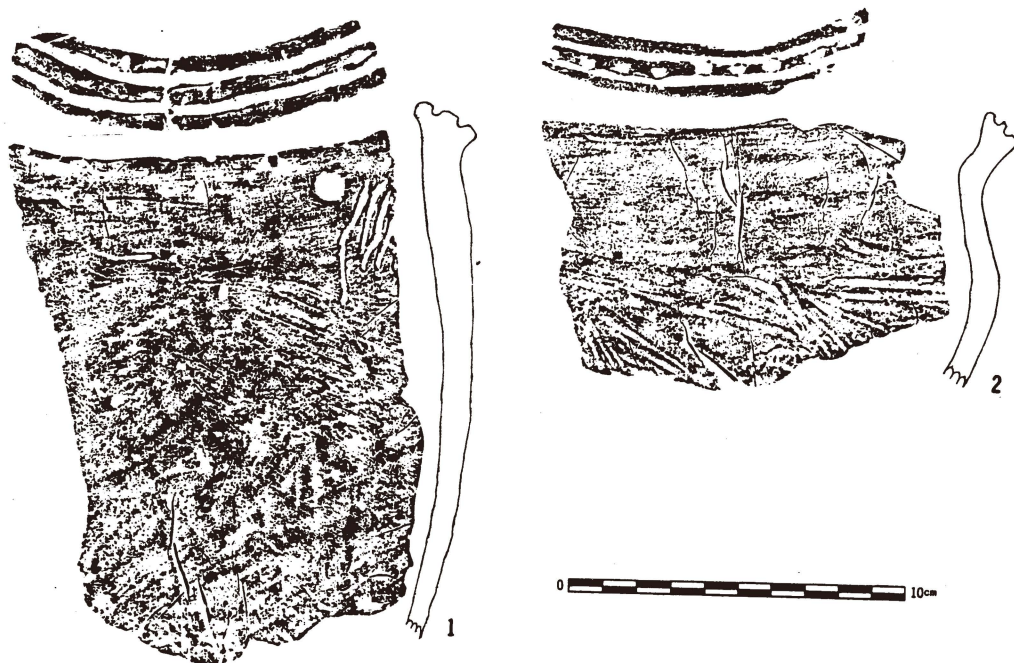
第四図 1.松山式の祖形土器（志布志町倉園） 2-6.松山式（上屋久町一湊）
2-6は一湊松山遺跡より

とどめるものがある。口唇部の文様は、口唇部の走向に並行して、1～3本の凹線または沈線を描き、山形隆起部その他に、口縁部走向に交わって、貝殻腹縁による押圧文または凹線文を施すもので、凹線に沿って連点を加えたもの（第5図2）もある。特に注意されるのは、凹線文の起点が深く彫り込まれるという特徴をもつことで、これは後続する市来式にも受けつがれている。貝殻腹縁は施文具として用いられるだけでなく、器面調整にも使用され、土器の内外面ともに顕著な貝殻条痕をのこすのも、この型式の一つの特色となっている。

一湊遺跡第7層の土器には、従来市来式にふくめたもの（第3図20～22）があり、市来式の古いタイプと考えられて来たが、このような土器の存在することは、松山式と市来式の近縁性を示すもので、口唇部文様帯が発達して外傾していったものが市来式として形成されたもので、文様帯の発達とともに、文様も松山式にあっては単純であったものが、市来式にあっては複雑華麗になるという傾向が必然的に生じ、終末期には文様帯からあふれて胴部上面におよぶに至ったのである（第4図・第6図）。

一湊遺跡調査後、1981年（昭和56）3月、鹿児島市が同市草野貝塚の発掘調査を行なった。市来式土器文化を主とする貝塚であるが、第5層までは市来式土器を出土したが、第6層上部からは多量の松山式土器が出土し、第6層下部からは指宿式土器が単純に出土し、一湊遺跡の層序を裏づける結果をもたらした。

市来式土器の発生については、1951年（昭和26）の草野貝塚発掘の結果にもとづいて、指宿式土器に後続するものと考え、両者を結ぶ紐帯として移行型式（Ⅴ層出土の土器）^④をあげた。この移行



第五図 草野貝塚出土の松山式土器

型式が松山式であった。松山式と市来式とを比較すると両者の結びつきがきわめて緊密で、松山式から市来式へ自然に移行していることが、器形の一致、文様要素の一致、器面調整法の一致などから明瞭である（第4図・第6図）。

松山式土器の分布については、従来市来式への移行型式として見すごして来ためんがあるので、市来式土器の出土遺跡には、松山式を出土する遺跡が相当あるものと考えられる。報告書についてあたって見ると、指宿市大渡遺跡^⑤、中種子町原尾遺跡^⑥、熊本県水俣市南福寺貝塚、志布志町倉園遺跡などがあり、南九州には相当広範囲に分布するものと思われる。

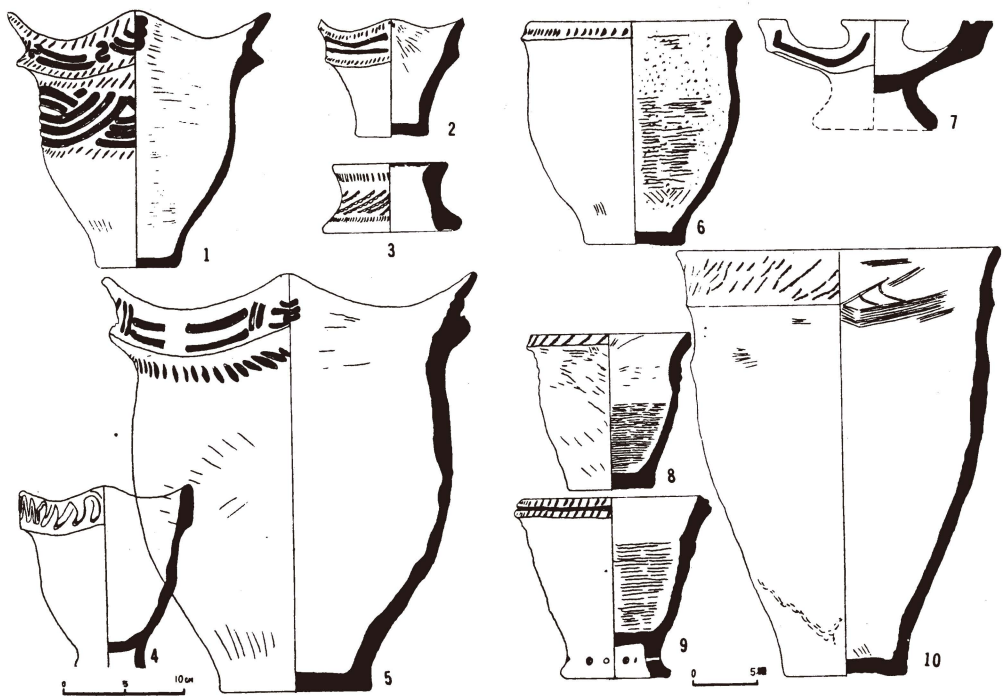
3

草野貝塚出土の松山式土器には、指宿式の文様に類似の施文が見られ^⑦、指宿式とのつながりも充分考えられるが、松山式の口唇部文様帯からの展開を考えると、祖形としては口唇部に文様帯を有する土器が適当である。そこであげられるのが志布志町倉園遺跡出土土器である。縄文中期後葉の岩崎下層式から、後期初頭の岩崎上層式平行の磨消縄文・擬似磨消縄文、後期前葉の二平行曲線文を施す指宿式と思われる土器、さらに後続する松山式土器（第7図・第8図・第9図・第10図・第11図）まで後期前葉を中心とする土器群である。これらの土器群の中で第4図1・第7図・第8図3の土器が、松山式の祖形と考えられるもので、指宿式の二並行曲線文を有し乍ら、指宿式には見られない、口唇部に文様を施す土器である。前述したように、この土器が松山式より先行することは、型式的に見ても明らかである。

口唇部に文様を施した土器には、早期の石坂式・吉田式・押型文土器、前期の手向山式・平袴式・塞ノ神式・曾畑式、中期の並木式・阿高式・岩崎下層式などがあるが、いずれも口唇部に刻目を施すか、凹点を刻む程度であって、文様帯としての意識が希薄の感をまぬかれない。ただこの中において並木式のみは、口唇部の文様に意図的なものが感じられる。後期にあっては口唇部に文様を施すものとしては、鐘崎式・西平式がある。しかしこれらはいずれも松山式より後出の型式であって、松山式への影響は考えられない。結局松山式に先行して、影響を与えた土器型式は、並木式以降の時期にしばって探索しなければならないが、現在は概当する土器型式は見当たらないようである。

指宿式土器は二並行線文を施文する土器として南九州に分布しているが、口唇部を文様帯とする土器は、倉園遺跡以外では、末吉町に出土遺跡があるときくだけで、ほとんど所在が知られていない。しかし今後同種遺跡が新しく発見されることはまちがちなかろうと思われる。ただ従来知られている指宿式土器の出土遺跡においては、口唇部に文様を施す土器が伴出しない遺跡が大半である。したがって口唇部を文様帯とする土器は指宿式土器から除外すべきで、別型式であるか、或は地域的な特色であろう。

縄文後期初頭の磨消縄文土器に、口唇部に凹線文を施す土器が見られる（第8図1・2・4～7）。2・4・5～7の土器は、田代町岩崎遺跡上層出土の土器で、岩崎上層式土器に共伴する。1の土器は同類の土器であるが鹿児島市福昌寺遺跡出土である。これらは岩崎遺跡の共伴関係、並びに1・



第六図 市来式土器（草野貝塚）

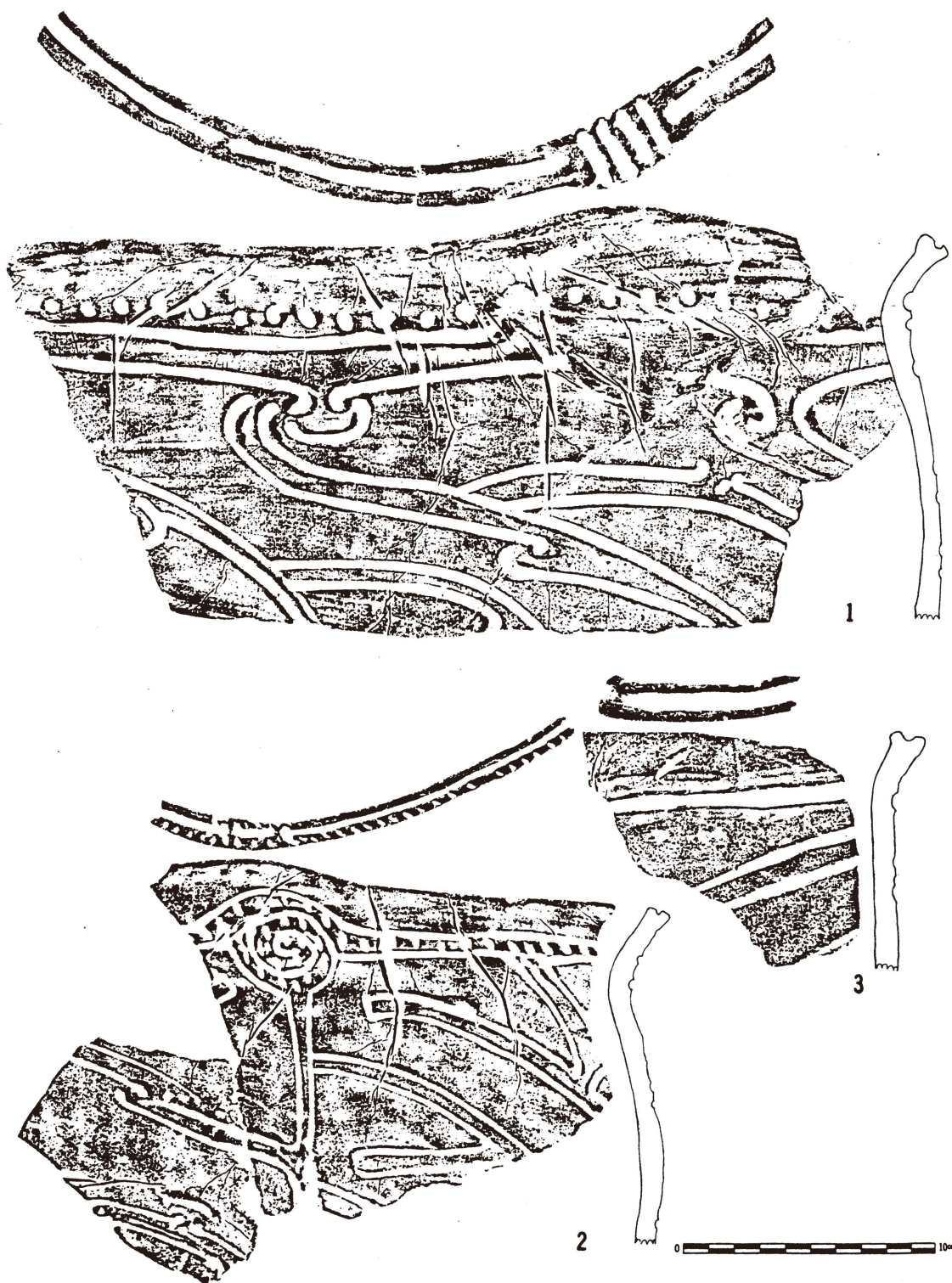
4・5の土器に見られる渦状文の様相から見て指宿式に先行するものと思われる。もし倉園の口唇施文土器を、指宿式の地域相と見るならば、前者に後続することになり、口唇面を文様帯とすることを重視して独立の型式と見るならば、前者に近い時期を想定することもできるであろう。

倉園出土の口唇面施文土器（第4図1・第7図・第8図3）

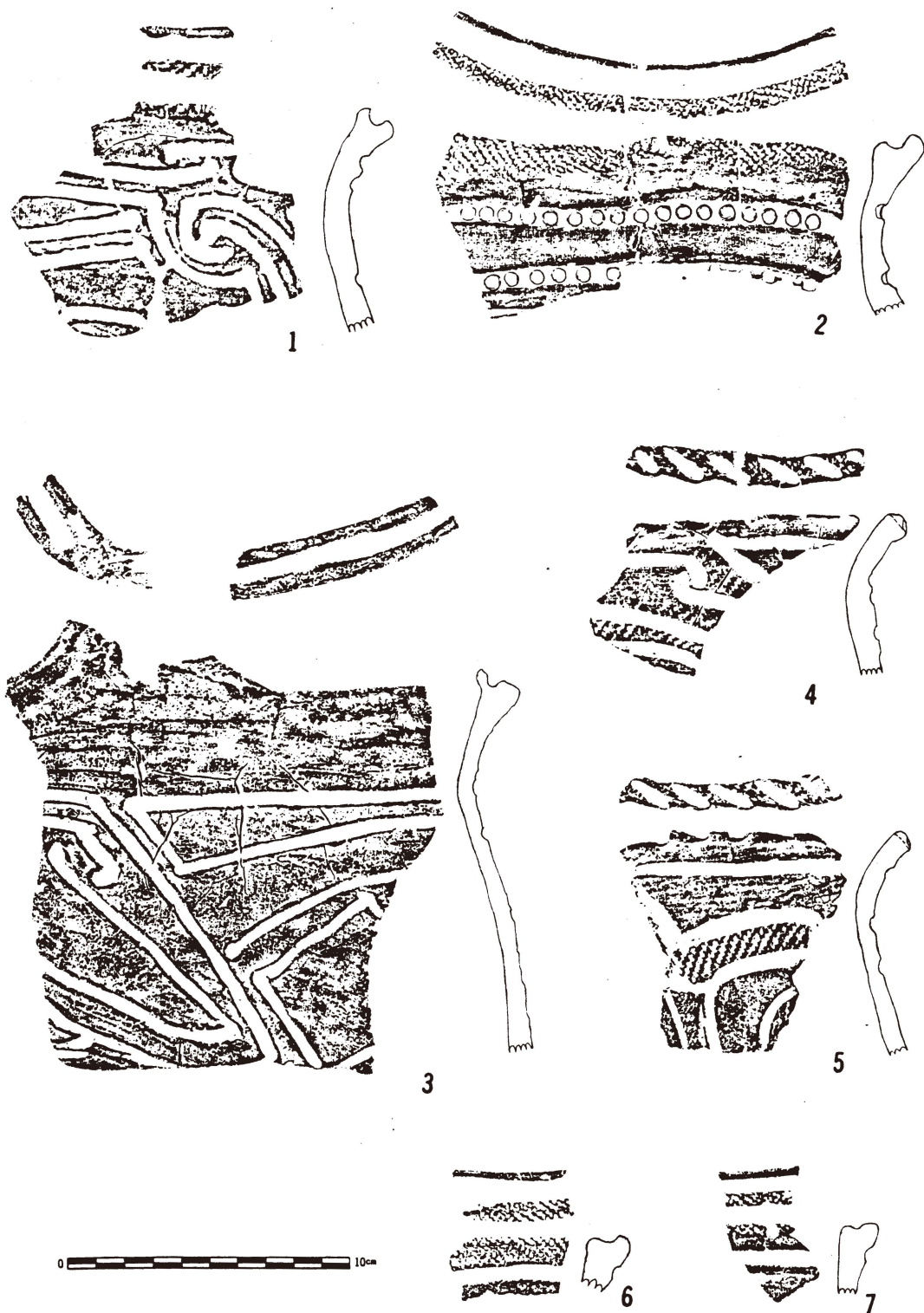
深鉢形平底の土器で波状口縁である。胴部はやや張り、頸部でしまり口縁部は外反する。口縁部は指宿式と異なり、施文のためにやや広がり、山形隆起部は厚く作られ、その直下に一孔を設けたものもある（第4図1）。文様は口唇部と胴部上面に施され、胴部文様は2並行曲線文が定形化しているが、岩崎式の手法にもとずく、線文を描く際に、起点を深く彫る手法が用いられ、この手法は松山式・市来式まで伝わっている。口唇面の文様は、口縁部の走向に沿って、起点にはじまる凹線を1条施し、山形隆起部には3条（第4図1）または4条（第7図1）の短い凹線を施す。口唇部上面に凹線に沿って連点を施すもの（第7図2）、口縁外端に凹点を施すもの（第4図1）、頸部文様の上端に沿って、横位の連点を施すもの（第7図1）、2並行線文の間に連点を施すもの（第7図2）などがあり、文様はすべて凹線文が用いられる。器面調整は、岩崎式以来大隅地域に盛行している、貝殻腹縁による調整が行なわれている。

その他の倉園出土土器（第9図・第10図・第11図1・2・4・10）

倉園遺跡には中期後葉の土器が出土し上限を示す。第9図4・5・7がそれである。7の土器は



第七図 倉園出土の松山式祖形土器



第八圖 松山形祖形土器 1. 福昌寺 3. 倉園 2・4～7. 岩崎出土

岩崎下層式で、5の土器も岩崎式で下層式と上層式の間間的な形態をもつ。4の土器は口縁外面に狭い肥厚帯を有し押圧文を施し、以下胴部には指宿式に近い凹線文を施している。

第9図1・2・3・6の土器は後期初頭または指宿式期に当るものと考えられるがそれぞれ特徴がある。

第10図2～5は後期初頭の磨消縄文土器、1・6・9および第11図2の土器は貝殻腹縁を連続押圧することによって擬似磨消縄文を施したもので、南九州の特徴的なものであり、瀬戸内の巻貝をころがす手法と対照的である。前者と同様に後期初頭に属するものであろう。

第10図7・8、第11図4の土器も磨消縄文土器であり、7は脚台、8は波状の沈線が重なるものであり、4は口縁部に近い橋状把手の部分であるが時期、系統など将来の解明にまちたい。

第11図10の土器はこの遺跡で最も若い時期を示すもので松山式土器である。

岩崎遺跡出土の土器（第11図1・8・9・11～15）

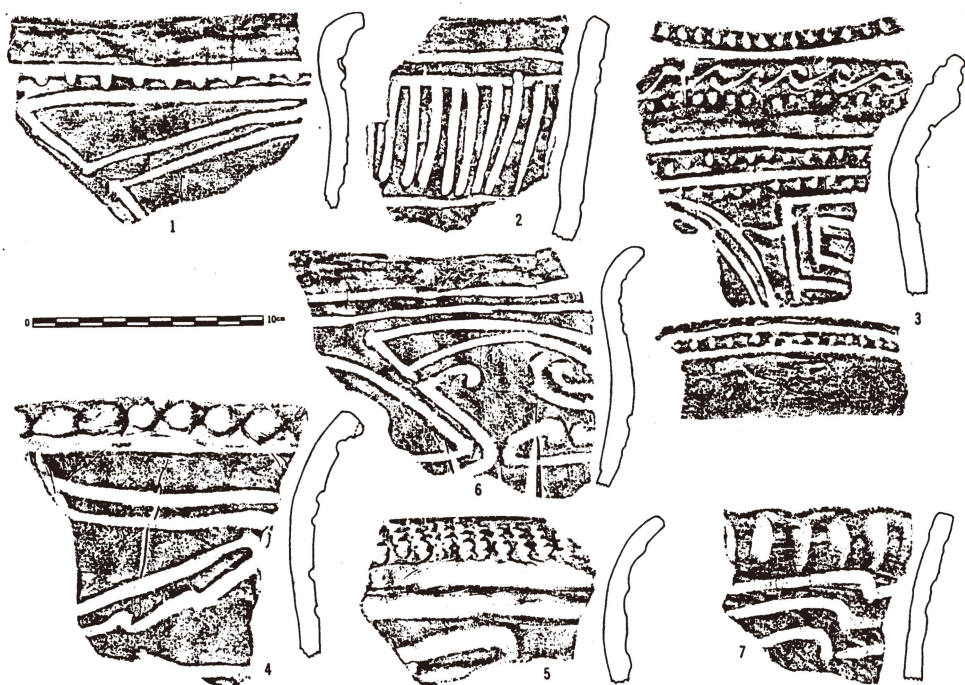
岩崎遺跡出土の土器はいずれも磨消縄文または、擬似磨消縄文である。岩崎上層式に共伴するもので後期初頭に属する。

市来貝塚出土の土器（第11図6・7）

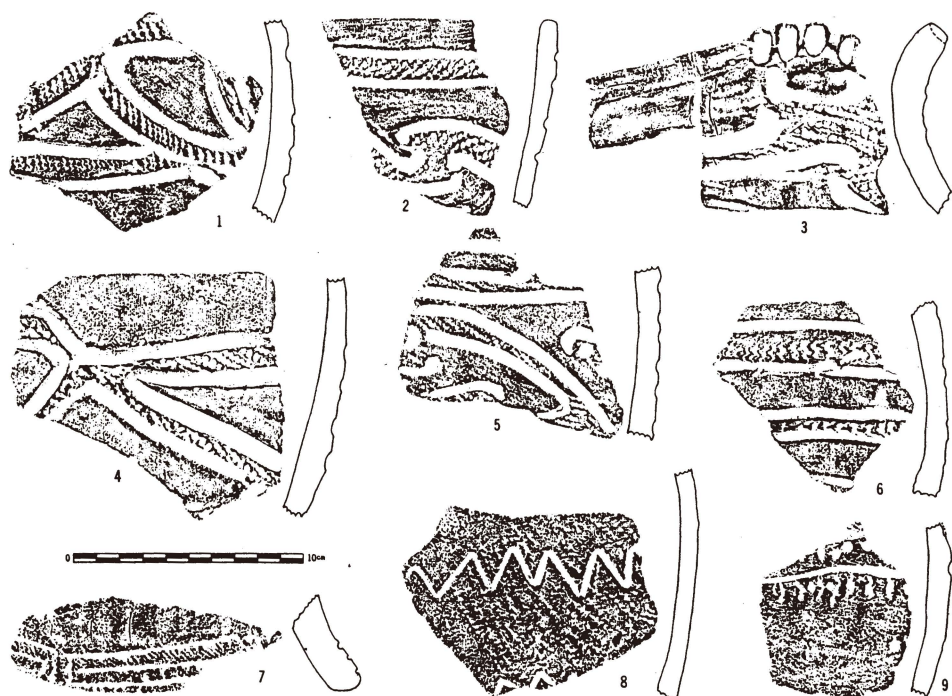
磨消縄文土器であり後期前葉に属するものと考えられる。

福昌寺遺跡出土の土器（第11図8・第12図1）

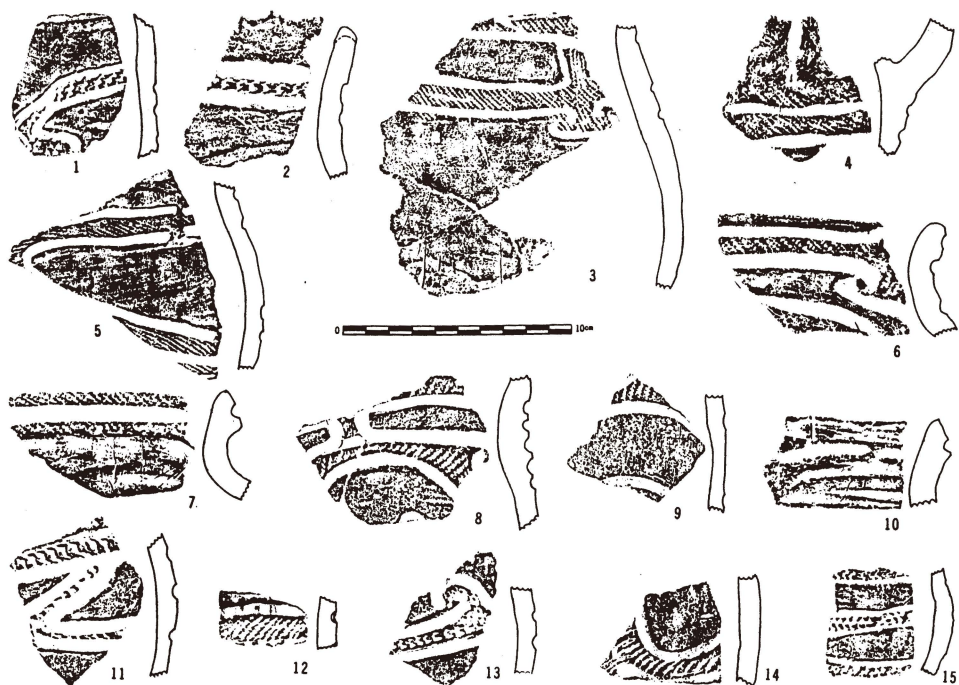
指宿式土器に磨消縄文の手法を施したものである。



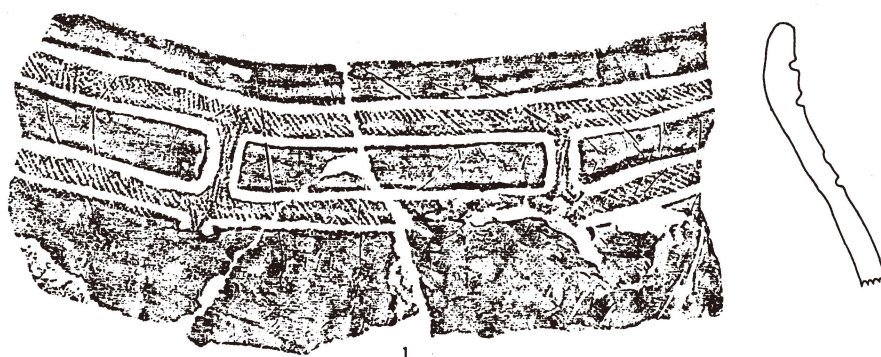
第九図 倉園遺跡出土土器



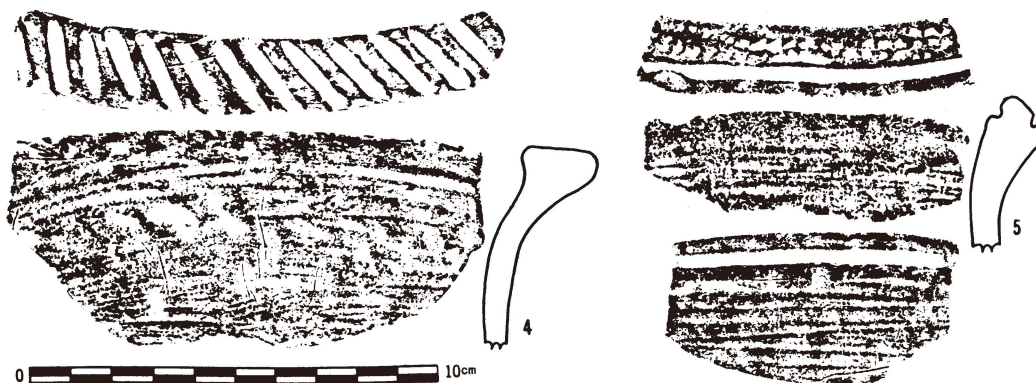
第十圖 倉園遺跡出土土器



第十一圖 1・8・9・11～15（岩崎） 2・4・10（倉園） 3（福昌寺） 5（春日町）
6・7（市來貝塚）



第十二図 磨消縄文土器 1. 福昌寺 2. 春日町



第十三図 宇宿貝塚出土の松山式土器

春日町遺跡出土の土器（第11図5・第12図2）

前者と同じく指宿式土器に磨消縄文の手法を施したもので、指宿式に共伴するものである。指宿式まではこのように磨消縄文が、南九州の土器に施文されるという形で行なわれているが、松山式では擬似縄文の痕跡が見られるだけで、磨消縄文の存在は明らかでない。続く市来式の時期になると、市来式に磨消縄文を施したものは全然見られず、そのかわりに他の地域で行なわれた鐘崎式・西平式などの土器が移入されるという形に変わっている。

4

松山式土器が奄美に移入されていたことが確認されたのは、上屋久町一湊遺跡の発掘（1981年）^⑨による。嘉徳遺跡では市来式に類似する土器として、市来式と面縄東洞式と融合した土器と共に取り扱われ、宇宿貝塚では類市来式^⑩として、市来式と面縄東洞式の融合型式土器と区別し、類市来式は南九州に由来するものとしたが、時期的には融合型式と変わらないものとし、南九州の草野式に近い要素をもつように思われると述べて、むしろ市来式土器より後出のものと考えた。

一湊遺跡の発掘に続いて草野貝塚の発掘によって、明瞭な層序によって確実に、松山式が市来式に先行することが確認された。この新しい編年資料と、松山式という新型式の認識にたつて奄美の資料を見なおした結果、松山式が奄美諸島の先史時代について重要な役割をになっているらしいことが判明してきた。

従来の認識では、本土からもたらされた先史時代土器文化の中では、市来式土器文化が最大で確実なものと考えられてきたが、実際には松山式土器文化が一時期早くもたらされ、しかも量的に見ても市来式土器の数をはるかに上まわっていることが明らかになった。嘉徳遺跡では資料のすべてを報告していないために不明であるが、1978年（昭和53）の宇宿貝塚発掘資料によると、宇宿貝塚出土の市来式土器の数は、12片11個体であるのに対し、松山式土器の数は、26片26個体で2倍を上まわっているのである。この事実は市来式土器文化の伝播以前に、松山式土器文化の大きな波が伝っていたことを示す有力な手がかりである。第13図に示す拓影は、この時期に本土方面から宇宿にもたらされた松山式土器の一部で、器形・文様・胎土・焼成など、本土で作られたものであることを良く示している。

第14図1は皿形台付土器の一部で、松山式土器と思われ、2・4は同じく松山式土器の深鉢形土器で本土方面からの移入品である。3の土器は重要な意義をもつ土器で、奄美で松山式土器を模して作られた深鉢形土器である。口縁部の把手状隆起部右側口唇部には、松山式本来の文様である斜行凹線文を施しているが、把手状隆起部および、把手状隆起部左側口唇部並びに、頸部に施された凹線文は、内部に刻目を有するもので、この後奄美の土器に盛行する「押し引き」施文法の初期的な文様である。従来奄美諸島に伝播した縄文土器を、そのまま模倣したものと異なり、独自の押し引き手法を加えたことは、奄美の先史時代土器製作史に、画期的な一時期を形成したものだといえよう。



第十四図 1. 台付皿形土器 2・4. 松山式土器 3. 松山式を模した奄美土器（宇宿貝塚出土）



第十五図 面縄東洞式土器（宇宿貝塚）

笠利町万屋ケジ遺跡（1981年中山清美発見）からは、松山式土器と共に、松山式を模した土器の口唇面に、あじろを押したような文様を施した土器が出土している。前述の宇宿貝塚出土の第14図3の土器に施された押し引き手法の初期施文法と共に、籠の編み目をモチーフにして発生した奄美独自の施文法の誕生ではなかろうか。沖縄諸島に見られる先史土器文様の基本形となっている幾何学的連線文様も、同様の源流にもとづくものではなかろうか。

松山式を模倣した奄美発生の土器は、松山式土器の再認識と共に、新しく発見されたものであるだけに、その発見数も少ない。したがってまだ型式名もないが、宇宿貝塚の発掘資料について見ると、松山式土器は同じく本土よりの移入土器である市来式土器よりも、出土量は圧倒的に多い。しかるにそれぞれの影響を受けた土器は、逆に市来式土器の影響を受けた土器の量のはるかに多い。その理由は単に新発見の型式であるだけでは理解しがたい面がある。それは、松山式の影響下に作られた土器が、奄美で創造された初期のものであったためではなかろうか。

松山式の模倣土器に後続する土器は、面縄第4貝塚東洞穴の最下層（第5層）出土の土器を標式とするもので、平底の深鉢形土器で口縁部は外反し、わずかに肥厚して文様帯を構成している。波状口縁と平坦な口縁形とがあるが前者はまれである。文様帯は、籠の編目をモチーフとした押し引きの沈線文で飾られ、松山式模倣土器から受けつがれた文様は、この時期に完成し定形化して、以後の奄美先史土器型式の基本文様となっている（第15図）。



第十六図 南島出土の市来式土器 1～5（嘉徳） 6（浦添） 7～9（宇宿）

松山式模倣土器から面縄東洞式の時期にかけて、奄美諸島先史土器文化が発生したものと考えられる。

5

南島では松山式土器につづいて市来式土器の伝播が見られる。現在までに発見された南島出土の市来式土器について見ると、本土に近い宇宿貝塚や嘉徳遺跡出土の土器は古いタイプであり、遠く離れた浦添貝塚出土の土器は新しいタイプである。すべての伝播土器が発見されたわけではないので、伝播の時期の順序や、多寡を示すものともいいきれないが、北から南への先史文化伝播の流れの存在を考えると、発見土器の現況がある程度真実に近いものとも思える。市来式土器が伴関係にある面縄東洞式にあたる影響についても、最も本土に近い宇宿貝塚において顕著であるが、徳之島面縄第4貝塚や沖永良部島長浜貝塚^⑪にもその現像が見られる。ここでは宇宿貝塚の資料について考えたい。

市来式と面縄東洞式との接触によって生じた土器を、面縄東洞式+市来式(融合式)^⑫としたが、簡略をとって以下融合式と呼ぶことにする。二つの異なる土器文化が接触して融合する場合、種々の形態があると思われるが、宇宿貝塚の場合は、器形と文様の結合という形をとっている。市来式は器形を残し面縄東洞式は文様を残しているのである。

融合式は4つのタイプに分けられる。第1のタイプは第18図に示されるもので、器形は市来式の口縁断面が三角形を呈するが、文様は面縄東洞の押し引き手法を用いるもので、且つ籠編みの形が尚残存するもので、文様が原形に近いものである。

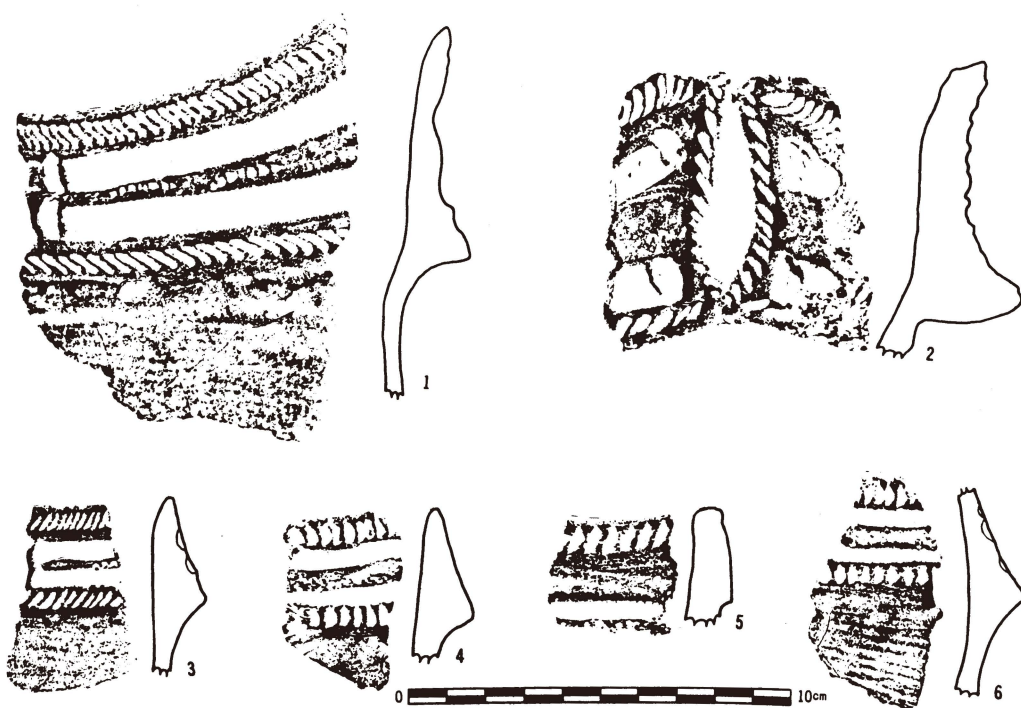
第2のタイプは、市来式の器形に押し引き文様を施すが、籠編みの原形から離れて平行線化し、あるいは楕円形を描くなどしたものである(第19図)。

第3のタイプは、第20図に示されるもので、市来式の器形に押し引き文様と、市来式の特徴である起点を深く彫って凹線を施す手法とが用いられるもので、押し引き文様はわずかに残存する程度になり、図2の如きは山形隆起部裏面の点文まで施し、最も市来式に近いものである。

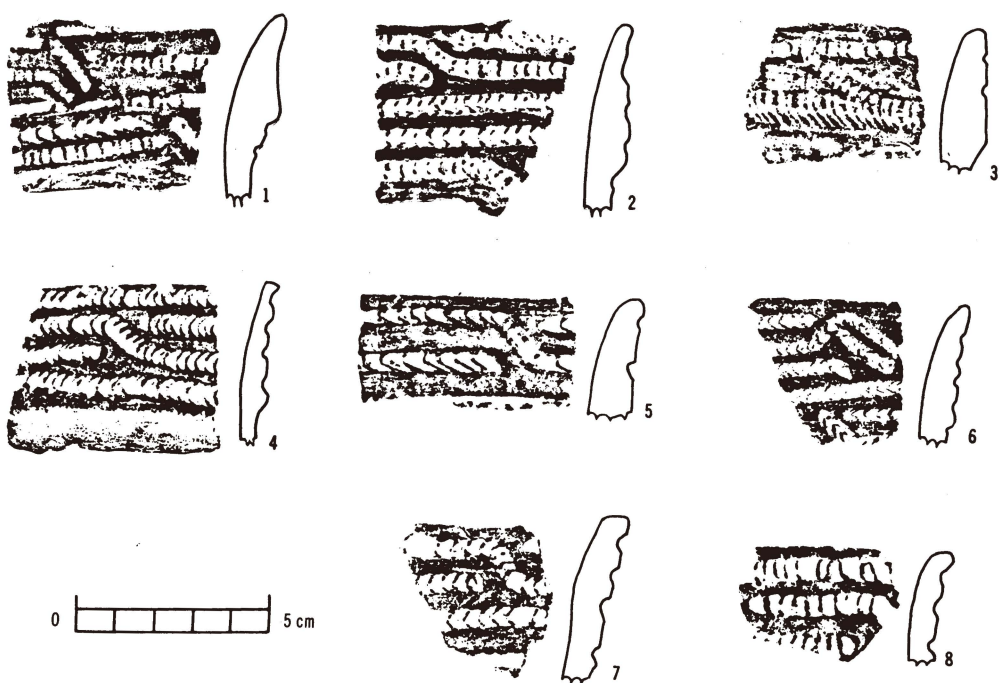
第4のタイプは、第21図に示すもので、市来式の器形に、押し引き文を施すが、施文法がみだれ、器面調整に市来式の手法である貝殻腹縁を用いるものである。

以上の4つのタイプに共通することは、いずれも市来式の器形を守っていることで、文様については押し引き手法だけは確実に守っているが、籠編の原流を理解していないふしを感じられる。おそらく南九州の市来式文化圏からの移住者の手によって、融合式土器の製作が行なわれたものであろう。そのためでもあろうか、融合式土器は面縄東洞式以後の、奄美諸島の土器文化には、あまり影響を与えていないようである。

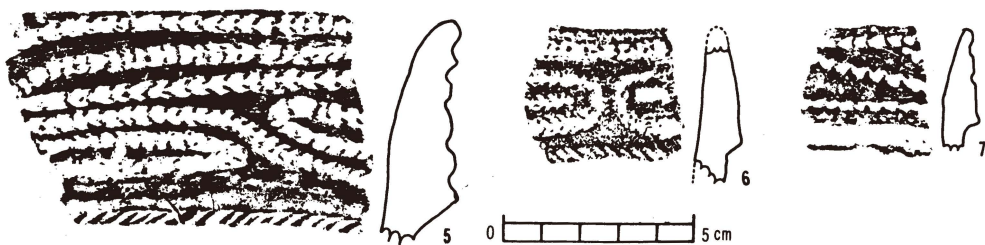
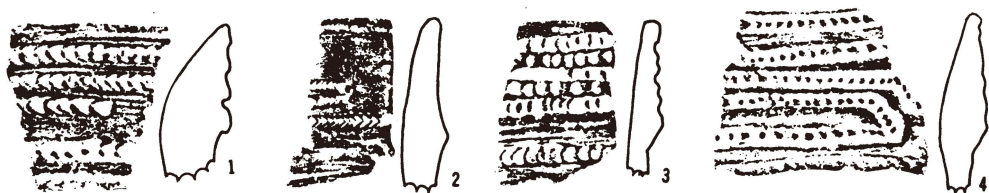
融合式の作られ使用された時期の問題がある。一般的には源流をなす市来式や面縄東洞式に比べて、一時期遅れるというのがきわめて一般的な見方であろうと思われる。ところが宇宿貝塚における敷石住居址内の出土状況を見ると予想外の結果になっているのである。第22図の右下は1978年(昭



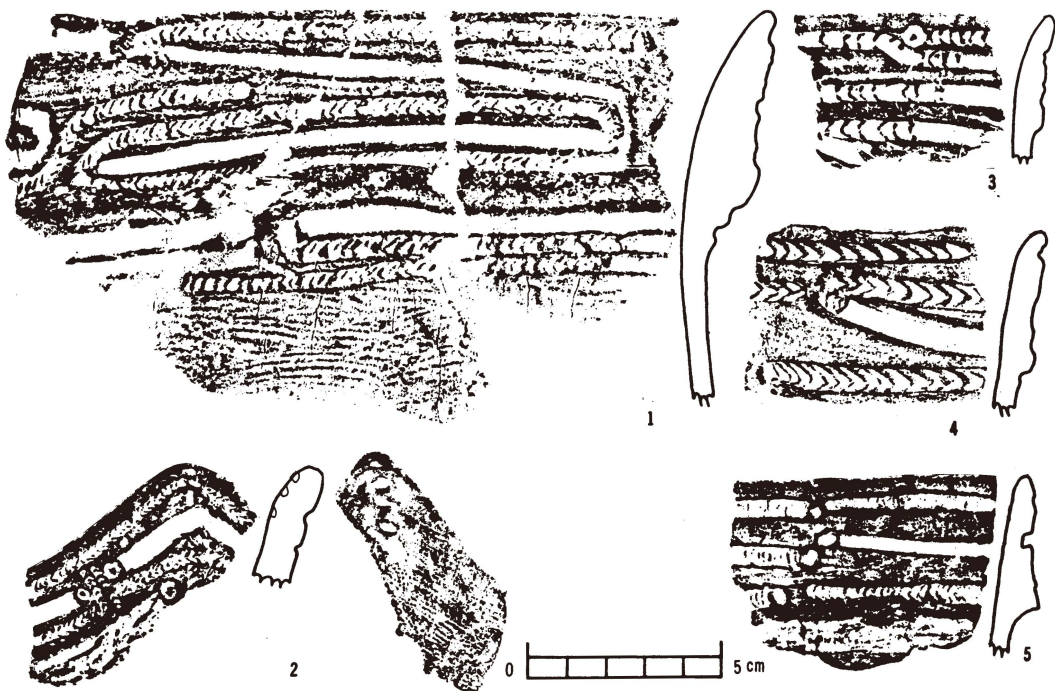
第十七図 宇宿貝塚出土の市来式土器



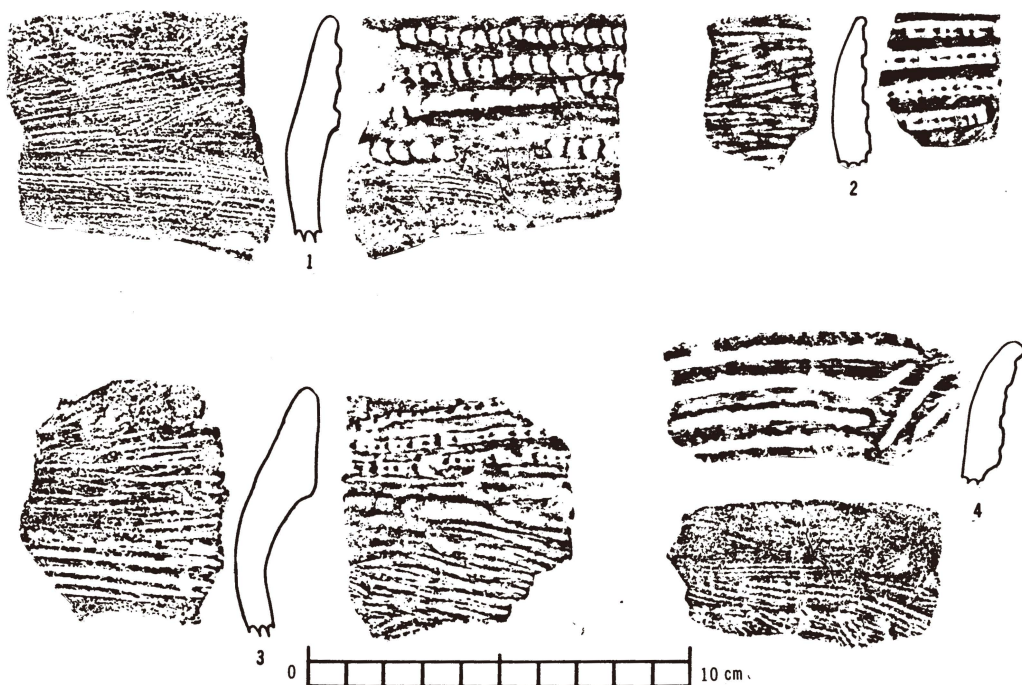
第十八図 市来式+面縄東洞式（宇宿貝塚）



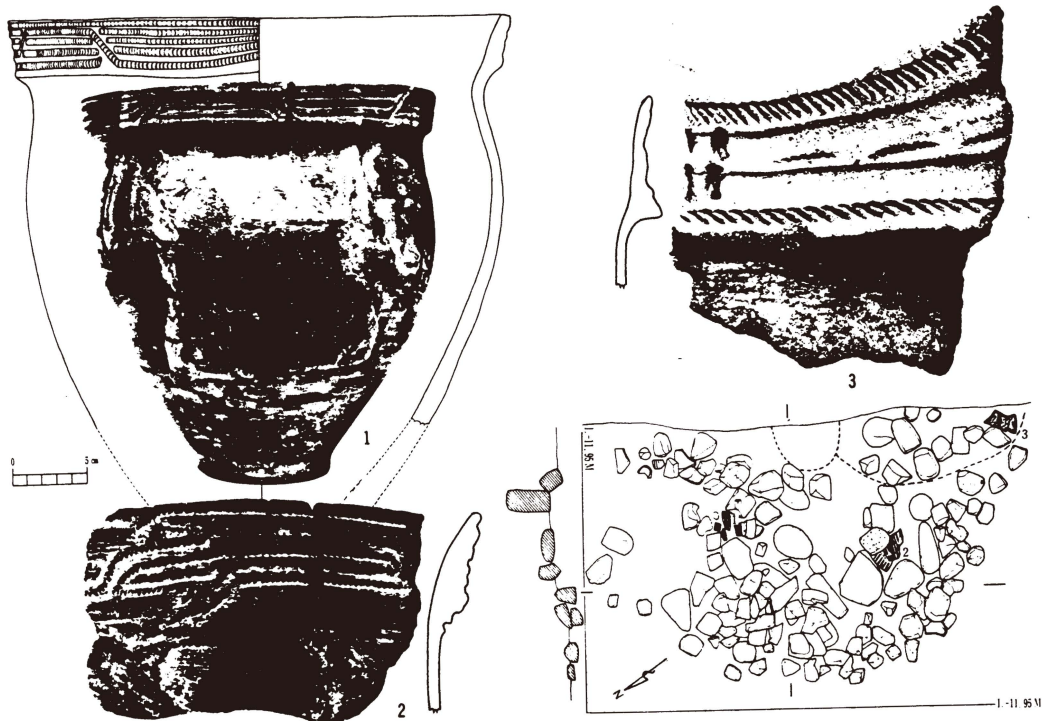
第十九図 市来式+面縄東洞式（宇宿貝塚）



第二十図 市来式+面縄東洞式（宇宿貝塚）



第二十一図 市来式+面縄東洞式（宇宿貝塚）



第二十二図 敷石住居址出土の土器（宇宿貝塚）

和53)の発掘によって発見された敷石住居址の図であるが、図中の1～3の数字は、住居址床面に密着して出土した土器に付したものである。同図中の土器図は住居址出土のものである。図1・2は融合式であり、図3は移入された市来式である。この出土状況は原流をなす市来式土器と、融合式土器とが同時に使用されていたこと、即ち同時期に属することを示しているのである。

遺物の型式の推移について、きわめて常識的に、何の証明もないにもかかわらず、あたかも自明の理である如く、移行型式などの変化型式を後出のものとして取り扱うことには、一歩しりぞいた慎重さが必要であろう。

6

松山式土器の伝播が、奄美において再認識されたばかりであるので、松山式土器の南島における分布と、その影響の状況については、今後の研究・調査によって確実にして行くことが必要である。このことは南島先史時代文化の成立にかかわると思われるからである。

縄文時代草創期より中期までは、奄美にあっては独自の先史文化は見いだすことができない。かといって各時期の縄文土器文化が発見されているわけでもなく、現在多くの空白の時代が相当に存在する。しかし一方ではこの空白を満たすような発見が次々に生れている。このような縄文文化の伝播の流れのなかで、後期に至って俄然様子が変わり、南島独自の先史文化が発生し、はじめて南島先史文化圏が成立したと思われる。従来南島先史文化圏の範囲については種々の提唱が行なわれてきたが、時期についてはふれるところがなかった。

松山式土器文化は、この南島独自の先史文化の発生に大きくかかわっていると思われる。もちろん南島先史文化の発生は、ある日突然ということではなく、沖縄県読谷村の渡具知東原遺跡出土の土器や、笠利町高又遺跡出土の土器などに見られるように、伝播した縄文土器文化の影響のもとではあるが、独自の土器づくりの文化の積み重ねの上に成立したものであることはいうまでもない。ここに松山式土器文化をあげる所以は、この文化が奄美先史文化発生を触発するところがあり、以後奄美独自の先史文化が成立して行ったと考えるからである。具体的には種々の様相があったであろう、また地域によって種々の変様が見られるにちがいない。必ずしも松山式がすべてにかかわっているとは思われない。しかしここに投ぜられた一石が万波を呼んで、南島独自の先史文化が生れたのではなからうか。勿論大陸・南方からの影響もあり、南島独自の文化もあったと思われるが、北方からの文化の流れが主流であったように思われる。

註

- (1) 三森定男、西部日本の先史学講座第一巻、1938
- (2) 戸崎勝洋他、阿多貝塚、金峰町埋蔵文化財調査報告書(1)、1978
- (3) 出口浩・繁昌正幸、一湊松山遺跡、上屋久町埋蔵文化財調査報告書、1981

- (4) 河口貞徳，草野貝塚発掘報告，鹿児島考古学会紀要第1号，1952
- (5) 国分直一，指宿市大渡遺跡試掘報告，鹿児島県考古学会紀要4号，1955
- (6) 盛園尚孝，中種子町郷土誌，1971
- (7) (4)に同じ
- (8) 瀬戸口望，倉園遺跡採集の指宿式土器について，鹿児島考古10号，1974
- (9) 河口貞徳，嘉徳遺跡，瀬戸内教育委員会，1974
- (10) 河口貞徳他，宇宿貝塚，笠利町教育委員会，1976
- (11) 高宮広衛，沖永良部の先史遺物，沖永良部島調査報告書，1981
- (12) (10)に同じ